

中学校 社会

中学校社会科の公民的分野において、
社会参画の資質を高めるための指導法の研究
— 市政への提案活動を通して —

むつ市立大平中学校 教諭 二本柳 一 直

要 旨

本研究は、中学校社会科の公民的分野において、社会参画の資質を高めるために、自分たちが住んでいるむつ市の課題を取り上げ、同市の活性化についてゲストティーチャーを活用した市政への提案活動を行うことが有効であることを実践的に明らかにしたものである。その結果、身近な地域や社会科への関心が高まり、社会参画の必要性や自ら社会の形成に参画しようとする生徒の表現が見られ、社会参画の資質の向上を示す変容が見られた。

キーワード：中学校 社会 公民的分野 社会参画 提案 ゲストティーチャー

I 主題設定の理由

中学校学習指導要領において、社会科の目標には「国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。」とあり、公民的分野の1目標(2)「民主政治の意義、国民の生活の向上と経済活動とのかかわり及び現代の社会生活などについて、個人と社会とのかかわりを中心に理解を深め、現代社会についての見方や考え方の基礎を養うとともに、社会の諸問題に着目させ、自ら考えようとする態度を育てる。」とある。以上のことから社会科で育てる公民的資質を公民的分野での学習では、主権者として政治に参加する意義を自覚し、社会の諸問題について自ら考えようとする態度であり、主体的に社会の形成に参画することと捉える。本研究では民主政治の意義の学習を通して、自分と社会との関わりに焦点をあて、公民的資質の基礎の育成と密接に関わる社会参画の資質の向上を図りたい。

しかしながら社会に目を向けると、先の第23回参議院議員通常選挙(平成25年7月21日投開票)の投票率(全国52.61%、青森県46.25%全国ワースト1位)からも分かるように、有権者の選挙離れ、政治への関心の低さは大きな問題と言える。大人としての社会参画の基本は、選挙権の行使ではないだろうか。社会科教育の指導の在り方が大きな要因であると、社会科教師として責任を痛感している。

義務教育終了段階にある中学校3年生の公民的分野の学習で、社会参画の資質をしっかりと高めて社会に送り出すことが社会科教師の使命であることは言うまでもない。しかしながら筆者のクラスでは、県学習状況調査をはじめとした諸検査では比較的高い結果を残しているものの、むつ市の社会的事象にはあまり関心がなく、授業においてグループ内では活発に発言するものの、全体の間では自分の考えがあっても発表しようとならない生徒が多い。また、他の人の意見にいともしず簡単に同意する傾向が見られる。このことは社会参画の資質が十分に育っていないことを示していると考えた。

そこで政治分野のまとめである地方自治の学習で、自分たちが住んでいるむつ市の市政を取り上げて、国政や地方自治の学習成果を生かし、市政への提案活動という体験的学習をゲストティーチャーを活用して行うことで、政治や地域に対する関心を高めた上で社会参画の資質を身に付けさせることができると考え、本主題を設定した。

II 研究目標

中学校社会科の公民的分野において、生徒の社会参画の資質を高めるため、自分たちが住んでいるむつ市の課題を取り上げ、むつ市の活性化についてグループで提案活動を行い、ゲストティーチャーを活用した学習方法が有効であることを、実践を通して明らかにする。

Ⅲ 研究仮説

中学校社会科の公民的分野「地方自治」の学習において、自分たちが住んでいるむつ市の財政難などの課題を取り上げ、グループによる市政への提案活動を行い、ゲストティーチャーによる回答、講評及び講話を聞くことによって、社会参画の資質が高まるであろう。

Ⅳ 研究の実際とその考察

1 研究における基本的な考え方

(1) 「社会参画の資質」とは

社会参画について中学校学習指導要領解説社会編第1章2社会科改訂の趣旨(3)には、「教育基本法及び学校教育法に規定されている「公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を養うこと」は、中学校社会科学学習の究極の目標である、公民的資質の基礎の育成と密接にかかわるものである。」とあり、社会科のねらいそのものと言っても過言ではないと考える。この記述からも社会参画の資質を、自ら社会の形成に参画しようとする意欲、態度と捉える。何もないところに社会参画の資質は高まらない。社会参画の資質の前提条件は「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」の4観点であり、この能力を活用し統合してこそ社会参画の資質が向上するものと考えている。本単元の学習を通して、地方自治の学習内容及び社会参画に関する4観点の定着もしっかりと図っていく。

岩田(1993)は、社会参加の方法は、啓発活動、交流、提案、直接参加の四つに類型されると述べている。本研究では、グループでは積極的に発言するものの、自分の考えをもちながらも全体場で発表しようとする意欲に欠けるという生徒の実態から、身近なむつ市の政治を取り上げ、グループでの提案活動を体験的な学習として行うこととした。

(2) 「体験的な学習」について

体験的な学習とは、五感を働かせて自分のもっている力を総動員して行う学習である。授業で学んだ力を活用することはもちろんのこと、自分の過去の生活体験が生かされる学習である。グループでは意欲的に発言し、その良さや効果を理解している実態がある。その利点を生かし、協同的な提案活動をねらう。この活動の中でゲストティーチャーを活用する。北(1996)は、「地域には言うまでもなくさまざまな人たちが働き生活している。社会科の学習がそれらの人たちの協力を得て展開されている。これらの人たち(社会人)を学校に招いて話を聞いたりすることによって、地域の人たちから「学ぶ」ことができる。また、互いに「触れ合い」のある活動を展開することができる」と述べている。地域には、学習に生かすことのできる人、もの、ことが多数存在する。その中から市政に携わる人材を活用し、触れ合いの中で学ぶ場面を設定した。

また、体験的な学習を通して習得した知識を活用することにより、知識がネットワーク化され、活用型の知識となることをねらう。それにより確かな定着(長期記憶化)が可能となり、短期記憶的な暗記教科という社会科のイメージを払拭できるものとする。

2 研究の実際

(1) 単元名 第3章 現代の民主政治と社会 第3節 地方の政治と自治

(2) 単元について

本単元は、地方公共団体のしくみや働き、住民としての権利や義務などについて理解し、よりよい地方自治の在り方を考え、市政について提案活動を行うものである。地方自治は「民主主義の学校」といわれるように、住民参加のもと最も身近な政治の単位である。むつ市の抱えている大きな課題の一つは財政難である。自主財源に乏しく、歳入の72.7%を国や県からの補助金や地方債に依存している現実(2011年決算による)を生徒に理解させながら、豊かな自然や美しい観光地、新鮮な食材などむつ市の魅力をどのように生かしていけば市の収入増加につながるのかを個人で考えさせ、実現可能または地方自治の学習との関連などの観点を基に班で合意形成をし、発表する提案活動を行う。また、ゲストティーチャーからの回答や講評、講話を聞くことで、自分と市政との関わりを実感させたい。

(3) 単元の計画 (6時間)

学習内容	配当	学習目標	むつ市との関連事項
1 わたしたちと地方自治	1	単元テーマ設定 「地方自治の学習をもとに、むつ市の収入を増やす提案活動をしよう。」 ○地方自治の意義，仕事を理解する。	○広報から同市の人口構成の特色や，財政面の課題を読み取る。
2 地方自治の制度	1	○地方自治のしくみを理解する。	○条例を確認し，市政にふれる。
3 地方財政	1	○地方公共団体の予算とその財源がどのようになっているか理解する。	○自主財源に乏しい現状を理解する。
4 むつ市の収入を増やす提案活動①	1	○個の意見をもとに，グループで実現可能か，地方自治の学習との関連などの観点から，一つに決定する。	○市政への提案内容に関する合意形成。
5 提案活動②	1	○提案内容の整理・まとめを行う。	○市政の資料を活用する。
6 提案活動③	1 (本時)	○班ごとに提案を発表し，ゲストティーチャーからの回答，講評及び講話を聞くことにより，むつ市への思いを文章にまとめる。	○ゲストティーチャー活用 むつ市職員4名

*事後指導

○ゲストティーチャーからの返信	○ゲストティーチャーからの返信を熟読し今後の学習につなげる。	○単元の振り返りに市役所からの手紙を活用する。
-----------------	--------------------------------	-------------------------

(4) 本時の学習

ア 題材名 「わたしたちの政治参加 市政への提案活動」 (本時6/6)

イ 本時の目標

むつ市の収入を増やす提案について，自分たちの班で合意した案を発表するとともに，他の班の提案やゲストティーチャーの回答，講評及び講話を聞くことによって，社会参画の必要性に気付き，社会参画の視点から「むつ市への思い」を自分なりの文章で表現することができる。

ウ 本時の展開

	教師の働きかけ	予想される生徒の反応	評価等
導入	○ゲストティーチャーの紹介 むつ市職員4名 ○前時までの流れの振り返り	○ゲストティーチャーを知り，学習意欲を増す ○単元の流れを確認する	□形態…個人 地方自治→むつ市→ 財政難→提案活動
展開	○本時の学習課題を確認 むつ市への提案活動を行い，むつ市への思いを書いてみよう。 ○提案を発表させる ○質疑応答(他班へ) ○ゲストティーチャーから提案内容についての回答，講評 ○ゲストティーチャーの講話 「現在，将来のむつ市」 ○質疑応答(ゲストティーチャーへ)	○本時の見通しをもつ ○班の案を発表する ○疑問点を明らかにする ○回答，講評を聞く ○講話を聞く ○疑問点を明らかにし，社会参画の必要性に気付く	評価① 関心・意欲・態度 (記録評価用紙，観察) 補助資料 「市職員の活動」他
まとめ	○単元の学習を振り返り「むつ市への思い」を文章化させる ○発表させる ○新たな発見，疑問などを発表させる	○ワークシートに文章化する ○発表する ○発表する	評価② 思考・判断・表現 (ワークシートの記述，発表内容)

3 考察

(1) 社会参画の資質について

他の単元のまとめの文章と本単元実施後のまとめの文章を評価基準に照らし合わせ、その割合を比較した。社会参画の視点に立ち、授業を行った他の単元では、意欲及び態度の両面での記述があまり見られなかったが、本単元では、むつ市への思いを双方の面から記述した生徒が増えた（表1）。

表1 他単元後と本単元後の社会参画の資質に関するまとめの比較

評価基準	他単元（司法権）後	本単元後
社会参画の資質に関して、		
A…意欲・態度の両面から表現されている。	16%	33%
B…意欲の面から表現されている。	48%	55%
C…どちらの面からも表現されていない。	36%	12%

◎単元のまとめ「むつ市への思い」（原文そのまま引用）

- ・むつ市の政治は身近なものではなく、他人ごとだと思っていた。しかしこれまでの学習を通して、むつ市はたくさんの魅力があるが、むつ市の財政は非常に苦しいものだということも分かった。自分は漠然と都会での生活を考えていたが、むつ市に戻ってきて就職し、行事やボランティア活動などにも積極的に参加してむつ市をより活性化させていきたいと思った。（A）
- ・計画しても簡単にできるわけではないんだなと思いました。お金や土地関係や、他の方々と協力していかないとだめなんだと勉強になりました。これからどうやったらむつ市が活発になるか、またどうやったら楽しいむつ市になるか、少しずつでも考えていきたいです。（A）
- ・今のままだと自主財源が足りないので、むつ市で買い物をしたりむつ市のPRをしたい。（B）
- ・むつ市にもいろいろなものを建てていって、いつか東京のような感じになって欲しい。（C）

(2) 社会参画の資質の前提と考える4観点の能力について

① 関心・意欲・態度

本単元の実施前後に行った自己評価アンケート結果を分析した。図1のむつ市の政治や財政についての事前調査では、ほとんどの生徒が「関心がない」と回答していたが、授業後には、「関心がある」または「やや関心がある」と回答した生徒の数が上回った。図2の地域でのボランティア活動については、興味がある理由として、事前は「楽しそう」「祖母がやっているから」といった消極的なものが多かったが、事後は「誰かの役に立ちたい」「協力したい」といった積極的な理由が多く見られた。図3のゲストティーチャーを活用した授業についても、事前では約半数が望んでいなかったのに対し、事後では「専門的な人の話を聞いてみたい」などの理由から希望している生徒の数が増えている。これらの数値の変化は、地域で実際に働いている人たちとの触れ合いから生じたものと捉えている。表2「どんな時、社会の授業が面白いと思いますか」の回答結果からは、事前・事後ともに「教科書以外のことを知った時」「自分が知らなかった知識が増えた時」が上位にきており、全体的に新たな知識の習得に喜びを感じていることが分かる。また、どの項目も割合が事前に比べて大きく向上している。

授業における生徒の姿について、合意形成の過程や提案内容の整理・まとめの場面では、社会科及び公民的分野への関心が高くなかった生徒たちが積極的に発言し、他と協調して話し合う場面を見ることができた。

これらのことから、社会参画の資質の前提条件と考える関心・意欲・態度の能力が向上したと捉えている。

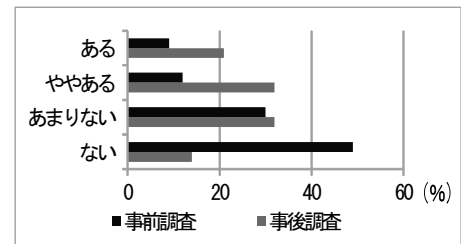


図1 むつ市の政治や財政に興味がありますか。

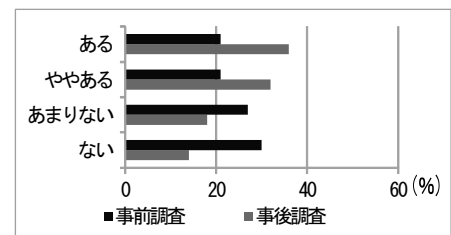


図2 地域でのボランティア活動に興味や関心がありますか。

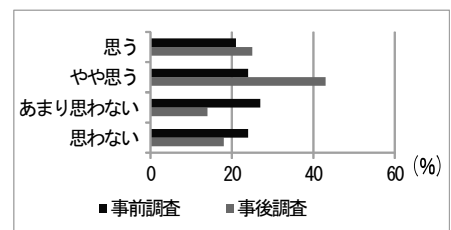


図3 学校の先生以外の方を招いて授業をしたいですか。

表2 どんな時、社会の授業が面白いと思いますか。(複数回答可)

事前調査結果		事後調査結果	
1 教科書以外のことを知った時	48%	1 自分が全く知らなかった知識が増えた時	71%
2 自分がある程度知っていた知識に、更に新たなことを知った時	42%	2 教科書以外のことを知った時	61%
2 自分が全く知らなかった知識が増えた時	42%	3 自分がある程度知っていた知識に、更に新たなことを知った時	54%

② 思考・判断・表現

他の単元のまとめの文章と本単元実施後のまとめの文章から分析した。

筆者のクラスは、県学習状況調査などの諸検査で比較的高い結果を残しているものの、社会的事象について重要なキーワードを用いて自分なりの文章でまとめることや、自分の思考を表現することを苦手としていた。しかし本単元では、全く記述できなかった生徒が減り、文章化できた生徒の割合が増加した(表3)。

むつ市への提案を個で考えたものをグループで合意形成する過程では、それぞれが自分の考えを意欲的に発表していた。実現可能か、むつ市の魅力を生かしているのか、活性効果はあるのかなどの観点で合意形成に向けて真剣に取り組む様子は、他の単元では見られない生徒の姿と言える。

これらのことから、社会参画の資質の前提条件と考える思考・判断・表現の能力が向上したと捉えている。

表3 他単元後と本単元後のまとめの比較

評価基準	他単元(立法権)後	本単元後
社会的事象(裁判員裁判, 地方自治など)の意義や役割を、 A…キーワードを用いて自分なりの文章でまとめている。	18%	36%
B…キーワードを用いてまとめている。	46%	58%
C…キーワードを用いてまとめていない。	36%	6%

③ 知識・理解, 技能

ア 他単元後の小テスト(知識・理解8問, 技能2問の計10問)と本単元後の小テストとを比較した(表4)。

知識・理解についての問題にはあまり差が見られなかったが、資料の読み取り問題については、本単元後の方が高い正答率となった。これは、本単元でむつ市の課題として焦点化した資料であり、生徒にとって身近なむつ市の事例を取り上げることにより定着したものと思われる。

イ 本単元直後の小テストを1か月後に実施し、他の単元と確かな定着(長期記憶化)の点で比較した。

1か月後の正答率は24%低下し、比較すると確かな定着(長期記憶化)が不十分だったと言える。ただし、地方財政についての読み取り問題の正答率は前回と同じく高いままであった。

これらのことから、社会参画の資質の前提条件と考える技能の観点では良い結果が得られたものの、知識・理解の観点では確かな定着に結び付けることができなかった。

表4 他単元後と本単元後の小テスト正答率の比較

他単元(司法権)後	本単元後
正答率・・・81%	84%

表5 単元終了直後と1か月後の小テスト正答率の変化

本単元直後	1か月後
正答率・・・84%	→ 60%
他単元(行政権)直後	1か月後
正答率・・・72%	→ 68%

V 研究のまとめ

ゲストティーチャーを活用し市政の提案活動を行うことによりむつ市への関心が向上し、地域のボランティア活動や地域の方との交流に参加したいという生徒が約7割に達した。また単元のまとめ「むつ市への思い」では、自分の言葉で社会参画の必要性や自ら社会の形成に参画しようとする表現が見られ、身近なむつ市及び社会参画への意識の変容が見られた。

これらのことから、むつ市の課題を取り上げて、ゲストティーチャーを活用した市政への提案活動は、図4で示されているように、公民的分野の授業を好む生徒が多くなる結果へもつながり、生徒の社会参画の資

質を高めるために有効であったものと捉えている。しかしながら生徒の社会科や公民的分野が好きな理由として、「テストの点を取りやすい」「ほとんど暗記だから」といったことが依然多いことから、社会科がもつ本当の面白さを理解していない生徒も少なくない。今後も学習内容が身近な事象と深く関わっていることを実感させていく授業づくりが必要である。

VI 本研究における課題

本研究において、社会参画の資質の高まりが見られる一方で、図5に示されているように公民的分野の授業中の発表について、「自分の考えがあるが発表しない」生徒数は減少しなかった。発表しない理由については「不安」「うまく考えがまとまらない」「他の意見に納得した」などがあげられていた。これでは、本当の意味で社会参画の資質が高まったとは言えない。原因は、第一に生徒の主体性を尊重するあまり本単元の既習事項を十分に活用させるよう支援できなかつたことである。第二には、むつ市がもつ魅力について十分に生徒に理解させられなかつたことである。そのため提案内容が、必ずしもむつ市がもつ魅力や資源をしっかりと捉えていないものになってしまった。

今回のような社会参画の資質を高める協同的な学習には、授業での人間関係づくりも更に必要と考えている。自分の考えがありながら発表しない生徒の理由にもあげられていた「不安」は、まさに人間関係がきちんと成立していないことの証であると思われる。いつも同じ組み合わせになりがちな班編成では「他の意見に同調する」生徒も出てくることが考えられ、その在り方に工夫が必要と思われる。また、話合いのテーマや発問の吟味（一つの正解を求めるだけでなく、たくさんの正解を求める発問）をしなければ、自信をもって自分の思考を表現できる生徒は育たないと考える。これらについては教師側の工夫が必要であり、合意形成の方向性をサポートする教師の指導力が更に必要となる。

また、確かな定着（長期記憶化）についても、先に述べた通り既習事項の活用の点が不十分であったため効果が見られなかつた。更に単元の学習内容を重要なキーワードを活用して記述することによって振り返り、定着を図っていく必要がある。

本研究を振り返り、社会参画の資質の前提条件を全てしっかりと定着できなかつたため、それらを活用し統合してこそ育つ社会参画の資質が一見高まったようには見えるものの、真の資質は向上したと言えない結果に終わった。しかし、それは逆に言えば「社会参画の資質」について、研究における基本的な考え方が正しいことが立証されたということである。今後は、社会科で育てる4観点の能力、つまりは基礎・基本の定着に更に力を入れ、公民的分野のみならず社会科三分野にわたり、社会参画の視点に立った授業づくりを計画的に行い、生徒の社会参画の資質を高めていきたい。

<引用文献>

- 1 文部科学省 2008 『中学校学習指導要領（平成20年3月告示）』, p. 31, pp. 41-42
- 2 文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説 社会編（平成20年9月）』, p. 6
- 3 岩田一彦 1993 『小学校社会科の授業分析』, pp. 148-149, 東京書籍
- 4 北 俊夫 1996 『「生きる力」を育てる社会科授業』, pp. 61-62, 明治図書

<参考文献>

- 岩田一彦 1994 『社会科授業研究の理論』 明治図書
 長谷川康男・臼井忠雄・都留覚・山下真一・鎌田和宏 筑波大学附属小学校社会科教育研究部編 2008
 『社会科好きの子どもを育てる授業』 初等教育研究会
 文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説 社会編（平成20年9月）』

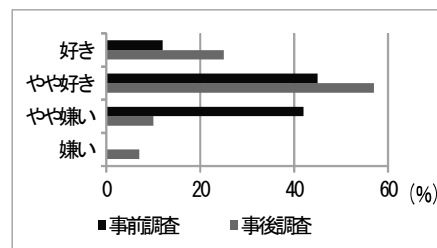


図4 公民的分野の授業は好きですか。

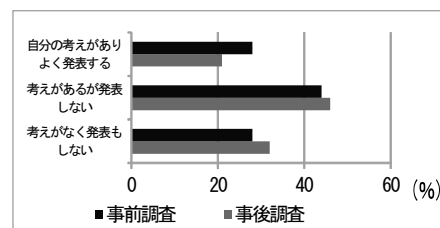


図5 公民的分野の授業中の発表について